

本の ひろば

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2017年11月1日発行（毎月一回発行）第719号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

愛読書は『悪魔の手紙』 上田好春

エッセイ

第16回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して
市川真紀

本・批評と紹介

藤本 満 著
シリーズ わたしたちと宗教改革1
歴史 林 牧人

大住雄一 著
シリーズ わたしたちと宗教改革2
聖書 井ノ川 勝

井上良雄 著
待ちつつ急ぎつつ 大野恵正

ティモシー・ウェア 著／松島雄一 監訳
正教会入門 久松英二

小塩 節 著
「神」の発見 斎藤佑史

上田光正 著
日本の伝道を考える4
日本の教会の活性化のために
加藤常昭

D.スチュワート 著／山吉智久 訳
旧約聖書の釈義 小友 聡

徳善義和 著
ルターと賛美歌 日笠山吉之

倉松 功 著
宗教改革と現代の信仰 上田 彰

鶴沼裕子 著
近代日本キリスト者との対話 深井智朗

ドナルド・K.マックム 著／原田浩司 訳
宗教改革の問い、宗教改革の答え
真田 泉

近刊情報

書店案内



11 NOVEMBER
2017

池澤夏樹氏
推薦!



キリストは再び十字架にかけられる
ニコス・カザンザキス
藤下幸子／田島容子訳

ノーベル文学賞候補に挙げられた文豪が紡ぐ、政治的・社会的・宗教的テーマを内包する重厚な人間ドラマ。世界中で愛される現代ギリシア文学の名作。

キリストは再び十字架にかけられる

● 四六判・768頁・本体3,500円

『ハイデルベルク信仰問答』の神学

L・D・ビエルマ
吉田 隆訳

宗教改革神学の総合



「最も美しい信仰の書」と評され、今日でも信仰の手引きとして愛されている『ハイデルベルク信仰問答』。その神学的主題と構造から、宗教改革期におけるエキュメニカルな精神までを、歴史的・批評的研究から実証的に明らかにする。

● A5判・384頁・本体3,700円

さらなる読書のために

『ハイデルベルク信仰問答』入門 資料・歴史・神学

● 本体3,200円

L・D・ビエルマ編 吉田 隆訳

歴史的・神学的背景、執筆者問題、そして翻訳の歴史や研究論文資料までを、信仰問答研究の第一人者がまとめた力作。

二つの宗教改革 ルターとカルヴァン

H・A・オーバーマン

日本ルター学会／日本カルヴァン研究会訳

ルターとカルヴァンを中心に、宗教改革研究を政治的・文化的・神学的に統合した名著。

● A5判・320頁・本体3,500円

刊行予定書籍

こころの深呼吸 気づきと癒しの言葉366

片柳弘史

● A6判・390頁・本体900円



インターネットで配信され、5万超の共感を集めたつぶやきを書籍化。現代に生き、悩み、まいにち頑張るあなたへ向けた言葉の贈り物。大切な方へのプレゼントとしても最適です!

11月刊行予定



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)
本のご注文は (e-shop 教文館) へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop 教文館



出合い・本・人

愛読書は『悪魔の手紙』——上田好春

今年の三月に、『十字架上の七つの言葉と出会う』（日本キリスト教団出版局）という翻訳書を出版させていただくことができました。原著者はウィリアム・H・ウィリモンで、この人の著書を訳すのは三冊目です。

題名通りに、イエスさまの「十字架上の七つのお言葉」を一つひとつとりあげて、その意味を考える説教集あるいは解説書（書）です。例を挙げると、主イエスの十字架上の第一のお言葉「父よ、彼らをお赦しください。何をしているか知らないのです。」は、父なる神と子なる神の対話であるとウィリモンは言います。それも、人類の歴史を貫いての神と神の対話、祈りであって、極端に言えば、「初めに赦しがあった」という事実が歴史の初めから終わりまで一貫していることを示していると、ウィリモンは主張します。ウィリモンの言説は、一見奇矯に思えますが、よく読むと、神と人との真実を端的に語っています。

ところで、翻訳をいくつか引き受けるようになって、若いころ、英語の「原書」を読む努力をしていたことを思い出しました。一九五九年、高校三年生になったころ、英語会話のクラブの友達が、「銀座にイエナという洋書店があるよ。一度行ってみな」と教えてくれました。その書店に一人で出かけて、目もくらむような思いでペーパーバックの棚を眺めました。

その初めての洋書店探索で、なんとなく心惹かれて買ったのが、C・S・ルイス著『The Screwtape Letters』だったので。黒と緑の彩色で悪魔の顔が描いてある表紙は、薄気味の悪い第一印象でしたが、ぱらぱらとみると高校生の私でも読めそうだと思って、少し気張って、買い求めたのです。新教新書の翻訳本（蛭沼、森安訳）『悪魔の手紙』も、まだ刊行されていない時期でしたが、これが生涯の愛読書となりました。

家に帰って、辞書を引き引き、読んでみると、実に優れたアイデアの本でした。悪魔の中級幹部であるスクルーティブが、後輩の新米誘惑悪魔ワームウッドに、人間をいかに誘惑して、彼らの「敵」である神から引き離すかをコーチしている手紙を集めたというスタイルの小説でした。

ワームウッドに誘惑される主人公と同様に、間もなく洗礼を受けた私は、夢中でこの本を読み続けました。この本の最後に人間の主人公（患者、担当の男）は信仰を持ったまま戦災にあって爆死、昇天してしまうのですが、この誘惑者は責任をとらされて先輩悪魔の餌食になります。『悪魔の手紙』の最後は、こう結ばれています。「いよいよ熱烈に、そして、飢え切って、愛情深い君の叔父 スクルーティブより」

（うえだ・よしはる 翻訳家。日本基督教団正教師試験合格者、国分寺南教会出席）

第十六回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して

市川真紀

——文学をとおした隣国・韓国との交流の楽しさ

八月上旬に韓国で四日間にわたりに行われた日韓の文学会議に参加した。キリスト教月刊誌『信徒の友』の編集者として、数年前に連載「あらずじで読むキリスト教文学」を二年間担当した縁である。その連載のアドバイザーであり、執筆者の一人でもあった柴崎聰さんからの誘いだった。他にも執筆してくださった先生が参加されるということで、半ばお礼参りのような気持ちで参加を決めた。文学者でもない私が参加してもいいのだろうかという思いもあったが、発表で取り上げられる作品に私が好きな堀辰雄の『風立ちぬ』があったので興味を引かれたという単純な動機もあったし、何度か訪れたことのある韓国の別の顔を見られるのではという期待もあった。

東北アジア・キリスト者文学会議。これが今回参加した会議の正式名称である。文学をとおした国際交流を目的に一九八七年、東京・水道橋の韓国YMCAで第一回の会議が開かれた。遠藤周作の『沈黙』が取り上げられたこともあって、著者本人もゲストとして出席した。第一回のみ日本、韓国、台湾からの参加者で構成されたが、第二回からは日韓のキリスト者文学会

議になった。それから一年おきに韓国、日本というように、会場を交互に移して開催してきた。日本の後援は、第一回から財団法人キリスト教文書センターである。

第一回からちょうど三十年の記念すべき会議となった十六回目の今回は、仁川国際空港からバスで三時間ほど南下した群山市で行われた。風光明媚な静かな港町である。参加者は、韓国勢は各地からの文人に地元ボランティアも含めて二十六名。日本勢は七名、私を除いて文学や教育に携わっている方々ばかりである。

初日の歓迎レセプションは群山市長招請で市民オーケストラの演奏があり、関係者が次々に表彰、紹介され、食事までに二時間を要したのには驚いた。文化の違いを感じたが、歓迎の意は十二分に伝わってきた。

実際の会議は二日目の午前、午後、夜（一）、三日目の午前に行われた。基調講演に始まり、分科発表では日本の詩、韓国の詩、日本の小説、韓国の小説について日韓の参加者たちが自分の言葉で研究発表、いずれも日韓、韓日の通訳がついた。日



3日目の午後の文化・文学探訪ツアーで日韓の参加者たちと

本側は発表者でもある芹川哲世さん、長濱琢磨さん（いずれも大学教授で妻は韓国人！）が会期中のみならず、全行程において通訳をこなしてくださり、大変助けられた。

それにしても驚いたのは韓国側の詩人、権宅明さんの卓越した通訳である。あらゆる日

本語の語彙を駆使するように適切な言葉を手繰る通訳ぶりに舌を巻いた。言葉を使う仕事の編集者が思うのだから、間違いないと思う。受け入れ側として総指揮、総合司会をこなしながらの激務であっただろうが、終始笑顔で誰にでも敬意を持って接する謙虚な態度に心を打たれた。

そんな通訳に、また彼が作成した日本語版の資料に助けられ、初参加で文学者ではない私も会議で話されたことの大方を理解し、興味深く聴講することができた。そして、いよいよ会議の

最後の発表は堀辰雄の『風立ちぬ』である。この作品の「芸術的世界とキリスト教」について京都外国語大学教授の長濱琢磨さんが、「キリスト教世界観的アプローチ」を韓南大学引退教授の呉昇在さんが発表した。

その後、質疑応答などさまざまな議論がなされる中で、私も発言の機会を得た。この作品が好きだというレベルでは、他者の研究発表について洞察したり批評したりすることはできない。ただ、私が感嘆したのは、とかくテーマから逸れがちな流れになることがあった中、呉先生がきちんと会議全体のテーマ「キリスト教作家たちの認識する（キリスト教的）世界観」に則り、作品、自分自身、そして堀辰雄におけるキリスト教的世界観を論じ分けたことである。そして、それが、この会議においては素人である私にもわかったということである。専門的なことを難しい内容構成、言葉で話すのは容易であろう。むしろ多くの人が理解できるように伝えることのほうが労苦はあるだろう。そうしたことを厭わずに取り組んだであろう呉先生の誠意が感じられる発表だった。そんなことを発言した。

言葉の壁を越えての学びがわずかながらもできたこと、文学をとおした日韓交流に参加することができたことを心からうれしく思い、貴重な体験ができたことに感謝している。それもすべてにおいて、私たちの間に神なる主が働かれていたためであると実感することができたのも今回の参加の大きな実りである。

（いちかわ まき＝編集者）

宗教改革はルター、カルヴァンでは終わらない！

藤本 満著

シリーズ わたしたちと宗教改革 第一巻
歴史——わたしたちは今どこに立つのか



林 牧人

宗教改革五〇〇年の節目に、今後必読となるであろう画期的な宗教改革史が上梓された。「宗教改革はルター、カルヴァンでは終わらない！」と帯に記されて、手に取る者たちを、ヨーロッパ、イングランドを刷新し、アメリカさらには日本へと伝わった宗教改革の信仰の旅路へと誘う。著者は、ウエスレー研究の碩学として知られる藤本満氏である。

藤本氏は、イムマヌエル総合伝道団高津教会主任牧師ならびに教団代表また聖言神学院で伝道者養成にあたるほか、東京神学大学、青山学院大学で講師を務め、学生からの信頼も厚い。近年『聖書信仰』（いのちのことば社）を上梓され、所謂「福音派」の立場から、聖書理解に関わる議論を大いに喚起するなど、神学のあらゆる領域において活躍されている。

今から二〇年ほど前「日本ウエスレー・メソジスト学会」の立ち上げに当たって、藤本氏より筆者に声がかげがあった。その趣旨は、ウエスレー・メソジスト研究において、所謂「主流派」と「福音派」が一堂に会する場がなく、その状況を打ち破りたいので協力を求めたいとのことであった。当時そのようなヴィ

ジョンを示される広い見識に驚き、また、藤本氏自身の立ちどころが「主流派」のそれとは異なることの自己理解が明確であればこそ発想であると受け止めたことを思い出す。

この自己理解と広い見識は、本書にも存分に現れ出ている。それは、教会史の「本流」に入ることができなかった人々への眼差しである。「ドイツ農民戦争」や「再洗礼派」に代表されるルターが包含できなかった「流れ」が、後の敬虔主義等につながっていくという指摘は刺激的でさえある。やがて、この流れがモラヴィア派を通じてウエスレーと出会い、メソジスト運動に流れ込んでいくという道筋を、ルター以来の領邦教会のあり方では十分到達できなかった「全信徒祭司性」の実現と展開という切り口で語られるのも新しい。

本書は、宗教改革の時満ちるまでの文脈を前史として明らかにし、ドイツ、スイスと改革の歩みをたどっていく。特筆すべきは、イングランドとスコットランドの改革の歩みに、前二者と同様の紙幅を割いて論述されていることである。このことは、今ある教派の多様性が、ルターという単一の起源からの分裂の

繰り返しによってもたらされたものではなく、ほぼ同時期にヨーロッパ各地で展開された改革の歩みの多様性にすでにその萌芽があることを意味する。しかも、その当初から互いに出会い、接触し、影響し合いながら発展してきたことが示される。一つでありながら多様であり、様々な前史を持つそれぞれの群れが、ルターの存在と働きに結ばれ、宗教改革をルーツに持つ教会としてその後の展開につなげていくという姿が明らかにされる。宗教改革のその後について、紙幅を十分に割いて論じられていくのも、本書の大きな特色である。プロテスタント教会の確立について、光の部分のみならず影の部分についても丁寧な論じて、時に自明のこととされてきたような事柄にも誠実に批評を加えている。また「プロテスタントの新ブランド」としてアメリカの諸教会を定義づけて、神学よりも体験を重んじ、教会制度を超えて民主的であるが故に急激に変化する社会に適応し、その課題に応える柔軟性を身につけていた反面、宗教改革の神

学的原則がふさわしく継承されていたのかどうかと問うている。ことに、ウエスレー・メソジストの系譜に属する著者の立ちどころが、この論述をリアリティあふれるものとしている。そして、この「新ブランド」こそが日本に伝えられた「プロテスタント」であると指摘される。さらに、日本の諸教会の歩みが詳述され、わたしたちの「今」に至る。総じて、宗教改革の伝統を学ぶことが、今、プロテスタントとして日本に生きるわたしたちの立ちどころを明確にするのだと奨められる。高校生が読んでもわかるものを、というシリーズの要請に見事に応えつつ、豊かな内容が詰まった一冊は、読書会などにも適している。多くの方に手にして欲しい一冊である。

(はやし・まさと) 日本基督教団西新井教会教師

(A5判・二五六頁・本体二四〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局)

聖書学の最新研究成果を反映
日本語で書き下ろす聖書注解
2017年10月刊行開始!!



NTJ 新約聖書注解
ガラテヤ書簡

世界的な新約学者が著した、パウロの論旨が明快になる最高水準の注解書

シリーズ刊行開始記念
特価 5184円
(2018年3月31日まで)

なぜ教会の破壊者が、異邦人宣教の使徒となったのか。このパウロの劇的な回心の背後にある、歴史と思想とを簡潔に語るガラテヤ書。本書簡を最新の研究成果に学びつつ読み解く。パウロ神学入門の役目をも果たす、聖書読者必携の書。A5判上製・538頁・通常価格6480円

忘れられない賛美歌・思い出の唱歌を
美しい写真付きで紹介する

こころの賛美歌・唱歌
あのなつかしいメロディーと
歌詞を歌う 大塚野百合 監修

「同じメロディーの賛美歌と唱歌」、そして「思い出深い賛美歌」など27曲を、楽譜と歌詞、カラー写真を添えて紹介。
B5判変型 上製・64頁・1,728円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigy@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)
http://bp-uccj.jp

罪認識から聖書信仰へ。改革の原点に立たせる書

大住雄一 著

シリーズ わたしたちと宗教改革 第二巻 聖書——神の言葉をどのように聴くのか



井ノ川 勝

宗教改革五百年の記念の年に、「わたしたちと宗教改革」というシリーズの第二巻として企画された書である。「聖書によつてのみ」という宗教改革の柱である「聖書原理」の本質を、副題の「神の言葉をどのように聴くのか」という視点により追求する。ルターの言葉で言えは、「福音の生ける声」を、いかに聴き、語るかを、今日の日本という宣教の場で真剣に問いかけている。「原点に立ち戻ることこそ、新たな出発である」という志を新たに与えられる内容である。次の五つの章から構成される。第一章「初めに——本書の見取り図」、第二章「聖書を捉える枠組み——律法と福音」、第三章「聖書をどう読むか——十戒を例に」、第四章「聖書をどう語るか——説教の務め」、第五章「聖書と合理主義」、終わりに「罪認識と宗教改革」。

本書が「一枚の写真」から始まっているのも興味深い。一八八三(明治一六)年五月二日に撮影された「第三回全国基督教信徒大親睦会」に集まったキリスト教指導者たちの写真である。日本のプロテスタントの中心的な指導者となる海老名弾正、植村正久、内村鑑三、新島襄といった錚々たる面々が並んでい

としてのキリストに受け継がれ、旧約から新約へ、新約から旧約へと生き生きした循環をもたらすと指摘する。

第三章では、「聖書のみ」の信仰に立つても、十戒の読み方が教派によって異なるのなぜかが問われる。聖書に二つの十戒があるが、本来一つであったものが、伝わる間にそれぞれ形を変え、少し違う十戒になったと考えられる。しかし、著者は安息日の規定の違いに目を留め、初めから二つの別々の安息日規定があり、正典において二つの別々の十戒が伝えられ、教会の中で十戒は一つにまとまったと興味深い理解を示す。互いに矛盾して見える事柄が、双方とも独りの神の矛盾のない意志であり、そこに神の言葉の統一性を見る。

第四章では、聖書をどう語るか、なぜ、礼拝説教が必要なのか、というプロテスタント教会の本質的な問いがなされる。「第二スイス信条」の「神の言葉(聖書)の説教が神の言葉である」を挙げ、説教は「究極の聖書解釈」であると指摘する。説教という解釈の言葉が「礼拝説教」であるのは、聖書の救い

る。これらの面々に共通するものがある。それはみんな「生まれ育った言葉である日本語で聖書を読んだ」こと。ここに「神の言葉をどのように聴くのか」という宗教改革の信仰が現れている。ベンヤミンの翻訳論を紹介しつつ、「翻訳は、原典が表そうとしたことに向かつて、原典を補うものであり、原典と翻訳と相補いながら、本来の言葉の事件を実現する」と定義し、聖書は日本語に翻訳され、日本語で語られ、聴かれることを待ち望んでいる神の言葉であることに特質があると指摘する。それは同時に、日本語で聖書を説き明かす伝道者が必要とした。「一枚の写真」に写っていた若者たちは、そのような伝道者でもあった。

第二章では、聖書をどのように解釈したら、宗教改革の「聖書原理」にふさわしく読んだかが問われる。ルターが聖書釈義を通して発見した問題に、「律法と福音」がある。この主題が聖書を捉える枠組みとなる。「律法と福音」は何よりも礼拝の問題であることが指摘される。律法の本質は主の御名を唱える「神の現臨の場」であることであり、それが「神の現臨の場」の歴史を物語ることにより、物語の中に現臨する神を指し示すからであり、礼拝者はそこで神を拝むからだと言及される。

第五章では、「聖書のみ」を唱えた宗教改革が、聖書を合理的に理解する方法をもたらしたとし、植村正久がそれをいかに受け止め、日本にキリスト教を植え付けようとしたかが語られる。終章では、宗教改革は極めて強い罪認識をもたらしたとし、神の前での悔い改めに私どもを立たせる。そこに本書の意図があった。

旧約聖書神学者であり、伝道者を養成する神学大学の学長であり、伝道者である著者が、聖書といかに向き合い、聖書から神の言葉をいかに聴いて来たか、初めて神学的な書物として明らかにされた。宗教改革を記念する年に、日本で伝道する私どもを原点に立たせ、問いかける、小著であるが、どつしりと重い書物である。

(いのかわ・まさる) 日本基督教団金沢教区教師 (A5判・二二〇頁・本体一四〇〇円+税 日本キリスト教団出版局)

富岡愛美

絶望的なまじさから生きるまじさのなご豊かさへ

豊かな牧草地へ

四六判装、一四〇〇円+税
一四四頁・一、〇〇〇円+税
*絶賛発売中!

主を知る者とされて湧き出る霊の歌へと変えられたなり、私はそれを書き残し、主のみわざを伝えていきたい。徹底した絶望状態から満ちあふれる希望へと導き入れてくださった。圧倒的な主のみわざに、驚かされる。福音はますます私の内を生き活きと輝いていく。主が私になさってくれたことのように、主のみわざが人々の内になさっていくこと、この豊かな牧草地で、共に真の牧者にいこわせられることを、私は祈り願っています。霊想による初の詩集!

聖書に登場する

12人の非凡な女性たち

聖書はあなたに何をどのよう形づくられたか、ジョン・マッカーサー 山口衣子訳 *好評発売中!



平凡な女性たちの試練、苦難、喜び、勝利ある生活は、様々な方法を通して全員を非凡な女性に変え、私たちに聖書の教えに堅く立てるように励ましてくれる。二、五〇〇円+税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.

お問合せは info@yobel.co.jp

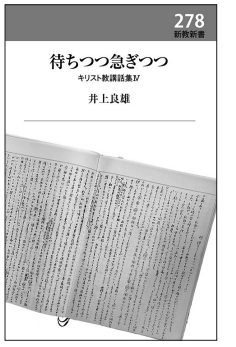
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1

TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

*自費出版の専門出版社*資料・星

戦後日本の最高の業績
井上良雄著

待ちつつ急ぎつつ
キリスト教講話集Ⅳ



大野恵正

この講話集は最初の二巻が広義の説教集であるのに対し、三巻と本巻は折々に語られた講演の類いを収めている。私はこの全四巻を読んで、ここには戦後の日本のキリスト者が表した最高の証言がまとめられていると痛感し、このような形でそれがまとめられて公けになったことを、心から喜んでいる。

この巻には、一九六五年から一九六六年までの三〇年間に著者が語った講話的メッセージ、キリスト教信仰に関するラジオ講演、教会修養会での発題や講演などが収められている。

最初に、著者との深甚な出会いを与えられた私事を記すことをお許しいただきたい。

私は、キリスト教とは無縁の所で生れ育ったが、一九五七年、堀切教会の牧師であった齊藤宏先生と出会って、その滅多には見られない人格に引きつけられて求道し、洗礼へと導かれた。一九五九年、平和への切願からキリスト者の反安保運動に加わった私は、その渦中で、この本の著者と出会った。

「キリスト者平和の会」における著者の祈りと振る舞い、発言と行動する姿を間近に見た私は、神の光を浴びて地の塩とさ

れるとはこのようなことかと、心の底に差ししるる光を仰ぐ思いであった。いつしか、この方が教えている大学で学びたいと願うようになり、それは新たな召命の促しを受ける日々を紡ぐこととなった。一九六一年―六七年、私は東京神学大学で学んだ。それは幸せな日々だった。

この大学で、著者から私はドイツ語を学び、信仰の修練を与えられた。ドイツ語教師としての著者については非常勤講師として出講していた他大学の学生からもその力量と人格的影響力の大きさを聞いたことがある。この面での井上良雄について語られることは少ないが、その講義を通して与えた影響は多大なもので、その秀逸な教師ぶりをもっと知られてよいと思っ

てる。この本は、そんな井上が、「語る」ために書き残し、死後発見された原稿ノートを復刻して出来たものである。

この本の最初の三篇は東京神学大学と信濃町教会で語られたもので、私はこの文章通りの著者の語りかけを実際に聴く僥倖を与えられている。それは聴いた日から今日まで、常に私を支え続けてきた言葉であるが、かつて聞いたそれをいま新しく

「読んで」、思いを新たにしている。そのあとの二篇は「虚無・死・ユーモア」と「私の理想とする人」と題した放送録音の原稿であって、ここには井上良雄の信仰に基づく人生の基盤が語られている。いずれも語られてから五〇年を経ているが、今もって読者を支える力強い人生の道しるべである。

この巻の中心をなすのは著者の教会論、国家論、キリスト者としてのあり方を語る部分であって、それが六篇ある。それは著者自身が導師としたカール・バルトの神学的主張を充分に咀嚼しつつ、この世を生きるキリスト者として歩んだ自己の信仰の表明となっている。したがってこの書物は、カール・バルトの教会論と国家論を精確に紹介しつつ、そのもとにたつ人間の豊かさや使命を告白する性質のものでもある。バルトの大部の書物を読みこなすのに難儀する者にとっては、格好の部分である。

井上良雄というと、大学や教団を巻き込んだ紛争の当事者だ



とレッテルを貼る人たちがいる。しかしこの講話集全体を読んでもみれば、そんなレッテルに意味がないことが分かる。ただひたすら、主イエスをキリストと信じ、その根拠に立脚して、教会と国家と時の中を、誠実に生き続けたひとりの忠実な信徒の生が立ち現れてくるからである。

著者井上良雄は、日本のプロテスタント教会に与えられた神の類いなき贈り物だったと私は思っている。この本はそういう著者を通して生み出された戦後日本の最高の賜物である。

これらの文章を掘り起こして編集された戒能信生氏を初め関係者に感謝を表すると共に、この叢書の出版を決断した新教出版社に敬意を申し述べたい。この叢書は、同社にとってカール・バルトの「教会教義学」の全訳本とともに、最高の宝になると信じるからである。

(おおの・よしまさ＝活水女子大学名誉教授)

(新書判・二八八頁・本体一七〇〇円＋税・新教出版社)





ジャン・カルヴァン

その働きと著作

ヴァルフェルト・デ・グレーフ
菊地信光*訳


ヴァルフェルト・デ・グレーフ
ジャン・カルヴァン
その働きと著作
菊地信光訳



一麦出版社

カルヴァンの「著作」を、
同時代の著作、論争、活動と
連動させて歴史上に配置、
関連する豊富な情報を
みごとに収集・整理し、
16世紀の文脈で、
カルヴァンの姿を浮かびあがらせた。

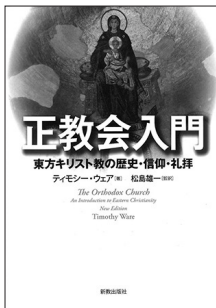
A5判・上製・函入
定価【本体6,800+税】円
ISBN978-4-86325-103-8



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

最良の入門書、待望の邦訳
 テイモシー・ウエア著
 松島雄一監訳

正教会入門
 東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝



久松英二

待望の名著の邦訳がついに出了。原著は、一九六三年の初版以来半世紀に渡り、英語圏において、正教の入門書として定番の地位を保ち続けている名著で、このたびの邦訳は大幅にアップデートされた二〇一五年刊行の最新第3版に基づく。著者のウエア師は正教神学界の世界的な指導者として知られ、現在、コンスタンティノープル全地総主教庁の管掌下にあるディオクレイア府主教という地位にある。一九三四年英国のバースで生まれ、英国国教会信徒として育った彼は、一九五八年に正教に改宗、司祭に叙せられた一九六六年から長きにわたりオックスフォード大学で正教神学を中心に教鞭をとった。修道名カリストスから「カリストス・ウエア」という名で親しまれているが、本書はまだ俗人だったころに執筆されているので、著者名は本名がそのまま用いられている。

本書は、第一部「歴史」と第二部「信仰と礼拝」の二部構成をとっている。第一部では初代教会からビザンツ帝国国教としての正教の発展と衰退、とくに西方ラテン教会との分裂に至る次第、そしてイスラム支配下の苦境時代を経て、ロシア正教会

の成立と発展に至る歴史が辿られたのち、二〇世紀における各国・各地域の正教会の現状が紹介されている。第二部では、正教信仰の源泉としての聖書、信経（信条）、全地公会議等を中心とする「聖伝」の位置づけ、至聖三者（三位一体）としての神論及び創造と神化をめぐる人間論、そして教会論、奉神礼（典礼）論、エキュメニズム（教会一致運動）論を巡る正教の信仰と実践の詳細な解説がなされている。

本書の卓越性の第一は、その読みやすさ、わかりやすさである。英国国教会から改宗してわずか五年、二十九歳という若さで書き上げたにもかかわらず、すでに熟成された深みのある内容となっているのも驚きだが、専門用語をまくしたてるのではなく、平易で簡潔な文体に徹し、また他教会との比較における幅広い情報を提供していることから、非正教徒にとっても大変理解しやすいく内容となっているのは注目すべきである。カトリックでありながら正教を研究している評者にとって、本書から（もちろん原著であるが）受けた恩恵は計り知れない。卓越性の第二は、本書の立ち位置が極めて「対話的」だということ

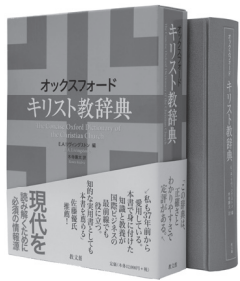
ある。確かに正教信仰の持つ真理性へのゆるぎない信念に鼓舞されている著者ではあるが、独善的態度は皆無で、カトリックなど他教会の立場についても実に虚心坦懐に扱われている。これは、現代ロシア神学者V・ロスキが、対西方諸教会強硬派の立場を取っているのとは対照的である。もちろん、このような「タカ派」についてもウエア師は十分な理解を示している。

しかし、彼自身は積極的なエキュメニズム推進派であることは、第16章「正教会と他のキリスト教会との再合同」を読めば一目瞭然であろう。その謙虚でかつ対話開放的態度から、ウエア師は非正教徒たちからも絶大な支持を受けている。評者も一度オックスフォードの学会で彼の講演を拝聴したことがあるが、会場を埋め尽くした聴衆が、彼の品位ある容貌とユーモアあふれる話しぶりにすっかり魅了されたのを思い出す。

ともかく、正教の全容を知るうえで、本書が最良の入門書であることは疑い得ない。このことは、海外のウェブサイトに投

稿された一般読者のレビューを一瞥してもよくわかる。かかる名著がこのたび日本語で読めることになったのは、大いに喜ぶべきことである。我が国では、キリスト教そのものが先進国では群を抜いて少数派であり、そのキリスト教でもさらに少数派である正教の思想を知るチャンスやメディアは少ない。本邦訳の出版は、その意味で計り知れない貢献を果たすであろう。しかも、その訳文がまた実にわかりやすい。訳文とは思えないほど自然で流麗な文体に仕上がっている。この見事な翻訳作業に携わった監訳者の松島雄一司祭をはじめ、合計七名の聖職者及び一般信徒の訳者に心から敬意を表したい。本邦訳の普及によって一人でも多くの日本人が、正教信仰の真の豊かさ、その魅力に触れてほしいものである。

（ひさまつ・えいじ＝龍谷大学教授）
 （A5判・四〇一頁・本体四〇〇〇円＋税・新教出版社）



E・A・リヴィングストン編 木寺廉太訳
 オックスフォードキリスト教辞典

●A5判函入・iO18頁・本体12,000円〔内容見本〕

西原廉太氏推薦！「神学、教会論、教父学、聖書学から礼拝学、宣教論に至るまでほぼすべての領域をカバーした、比類なき羅針盤」

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
 TEL 03-3561-5549
 星/図書目録 ●価格は税抜

言語の多様を生き生きと描く
小堀 節者

「神」の発見
銀文字聖書ものがたり



斎藤佑史

本書は、今もスウェーデンのウプサラ大学の図書館に残存する古代ゴート語の聖書写本『銀文字聖書』のルーツを探る物語である。ギリシャ語からこのゴート語へ聖書を翻訳した人物は、ウルフィラというゲルマン民族の一つゴート族の最初の司教である。従ってこの『銀文字聖書』のルーツを探る旅は、このウルフィラを軸に展開することになる。

聖書の翻訳と言えば、新約聖書をギリシャ語原典から、旧約をヘブライ語原典からドイツ語に翻訳したマルティン・ルターが特に有名である。ルターはもちろん、宗教改革者としてドイツばかりでなく、ヨーロッパ全体を揺るがす歴史的役割を果たした人物であるが、ドイツ文学の上では、強い信仰の上に立つてルターが訳した聖書の生きたドイツ語が、後のドイツ文学の基礎となり、その影響には計り知れないものがある。

それに比べると、本書で扱われる人物の物語は、時代ははるか昔、四世紀のゲルマン民族大移動の時に遡り、主人公ウルフィラの属したゴート族は、六世紀半は東ゴート王国が東ローマ帝国に滅ぼされた後、難を逃れてその子孫の一部がクリミア半

島に一五世紀まで生き延びたという史実はあるものの、使用されたゴート語はとうの昔死滅した言語である。聖書翻訳とは言え、はるか昔に滅びた民族のための、滅びた言語の聖書翻訳物語である。従って後世への影響という点では、ルターと比較にならない面があるとは言え、ルターよりはるか以前にルターのような信仰の上に立って、聖書翻訳を個人で生涯かけて成し遂げた人物がいたということは、驚くべきことである。日本のようなキリスト教が少数派の異文化の国では、ほとんど知られていない、その意味でも本書は意義深いと言わなければならない。そこで本書では、そのウルフィラの聖書翻訳作業が、いかに困難な状況下で行われたか、はるか昔の事ゆえに参考資料も乏しい中、彼の生い立ちの歴史的背景を辿りながら解明していくことになる。その中で注目すべきは、ルターの聖書翻訳と違って、ゴート語が他のゲルマン語と同じく文字のない音声言語であるために、ウルフィラは自らゴート語の文字を案出しながら、ギリシャ語からゴート語へ聖書を翻訳したということである。これがいかに困難な作業であったか、その格闘の様子を、著者は

二つの事例をもって示そうとする。一つは「神」を表すギリシヤ語の「テオス」を古代ゲルマン語の古語「グス」、もう一つは主の祈りの呼びかけの「父」のギリシヤ語「パテル」をゴート語「アッタ」と訳すに至った経緯である。この説明部分が言わば、本書の核の部分であり、著者が本書で読者に最も伝えたい箇所であると言つてよいであろう。

ゴート人を含めゲルマン民族は自然宗教の多神教で、唯一神を表現する言葉がない中で、ウルフィラが「グス」という言葉に出会うのは、まさに「神」の発見だった。このウルフィラの発見は、ヨーロッパ精神の源流にある、ラテン的精神世界とも違うゲルマン的精神世界の源流となる「神」の発見でもあると著者は言う。

そこに言わば後世に問題となるカトリックとプロテスタントの対立、その淵源の一つを見て取っているのは大変興味深い、さらに興味深いのはその「神」に出会うまでの具体的な翻訳作

業の記述である。即ち、源は同じ神でありながら、言語によって表現の仕方が違う、そもそも異なる民族の言葉は翻訳可能なのかなど、著者自らの翻訳の経験を踏まえて、翻訳者として格闘するウルフィラの姿を、心理描写を含め生き生きと描きながら追求している点である。これはエッセイストとしての著者の顔をのぞかせている面でもあり、細かい事柄を扱っても読者を飽きさせない類書にない魅力の源になっていると言えよう。本書は「ドイツ」という意識がゲルマン民族に生まれる前の物語であるが、ドイツはもとより、ヨーロッパとは何かということに関心のある人には是非読んでもらいたい本である。

(さいとう・ゆうし) 東洋大学名誉教授
(四六判・二七四頁・本体一五〇〇円+税・教文館)



新刊
生命の宗教
キリスト教

「神」をめぐる哲学的考察

竹田純郎著

●A5判並製 本体2500円+税

近代的思想家たちが「神」をどのように解したか、時代を追ってあきらかにし、乏しき時代における生命の宗教、キリスト教の可能性を探る。

【目次】より

- 序章 生命の宗教、キリスト教一乏しき時代における宗教の可能性
- 第一章 暗い時代の人レッシング、無一物なる生
- 第二章 シュライアーマッハー、プロテスタント神学のカント
- 第三章 謎めいた老人デルタイ、さ迷えるキリスト者
- 第四章 漂泊者ニーチェ、イエスの道化師
- 第五章 近代市民ウェーバー、アジア的キリスト者
- 第六章 境界の人A・カミュ、匿名のキリスト者
- 第七章 無即愛の弁証者田辺元、成りつつあるキリスト者
- 終章 乏しき時代における生命の宗教、キリスト教の可能性

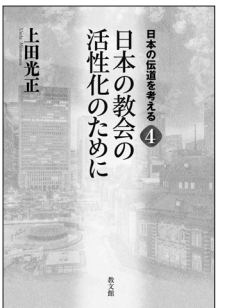
ISBN978-4-86376-059-2

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

伝道に労苦する人に向けて
上田光正著

日本の伝道を考える4 日本の教会の活性化のために



加藤常昭

力作である。著者は、既に七〇歳を超えているが現職の牧師である。東京神学大学、東京大学、更にドイツで学び、カール・バルト研究で学位を得ている。篤学の上である。四国の安芸、北陸の金沢、東京の山手で牧師を務め、今は下町で伝道しており、日本伝道の経験も多彩である。伝道しつつ、学びつつ、施策の成果をまとめた。それだけでも評価し得る。

久しぶりの著作というわけではない。むしろ反対である。二年前『日本の伝道を考える』という題で三巻の刊行を果たしたばかりである。それで終わりであったはずであるが、改めて決心して書き始めた。そしてA5判、本文二五〇ページ、注七〇ページという大冊となった。しかも、なお一冊が刊行される、と言う。伝道に携わりつつの著述は偉いものであるが、しかし、それに応じて次々と出版している出版社の貢献も大きい。

本書は緊急出版の趣がある。日本基督教団に象徴されるように日本プロテスタント教会は存亡の危機にあると著者は見ている。その関心が書名にも反映されている。「日本の教会の活性化」を願って書いたと言う。今の教会が命を失いかけていないか

ら新しい命を吹き込もう、と言うのである。その急所は説教と聖礼典にあると考える。更に絞れば説教である。そこで、この書物は何よりも説教を語る。初心の伝道者の手引きとなることを願っていると明言している。説教とも言える本である。

最初に著者の願う日本の地に根ざす教会像が語られる。日本プロテスタントの歴史の最初からあった公会主義と言われるものである。プロテスタント改革の当初から抗争を続けてきた欧米諸教派の存立には否定的である。著者の立つところは聖書であり古代教会であると明言する。合同教会である日本基督教団の神学的立場を整えるために貢献してきた著者らしい。

本論は二章に分かれる。第一章は教会の活性化を牽引するものを問う。教会のいとは何か、である。言うまでもなくキリストが臨在されることである。伝道とは生き生きとした生命感ある礼拝共同体としての教会が形成されることである。それは今生きておられるキリストが、そこにおられ、それを支えてくださることによる。その臨在を体験するのが礼拝であり、その中核をなす説教と聖礼典に注目する。しかし、著者は、これ

を更に聖霊論として展開する。バルトに学んだ著者らしく、バルトが願ったように必然的に聖霊論になると考える。ポーレンにも言及するし、スピリテュアリティも論じられる。

第二章「説教壇の向上を目指して」は、説教の課題を改めて論じることから始め、説教作成過程をかなり具体的に、著者の説教者としての体験を語り、具体例を挙げ、あるいは渡辺善太、ガダメーなどの解釈論を援用する。講解説教を念頭に置いているが、テキストの語るところをきちんと読み取れば、それを一五字、つまり俳句より少ない字数で言えるはずだという持論も登場する。特に力を入れるのは黙想である。これを「霊的黙想」と呼ぶ。その他、この小論では紹介しきれないほど多くの問題が取り上げられ、考察が続いて終わるのである。

私は伝道に労苦する人たちに本書を勧める。よく対話するとよい。しかし、そこで、どのような評価を受けるであろうか。極めて実践的な課題を自らに課した書物である。著者自らが認

めるように実践神学の書物である。そうだとすればシユライアマハーの実践神学理解、黙想論など、現代実践神学と対話して欲しかった。それはともかく、伝道活性化を促しているか。それが問われる。著者が願うアツピールをするためには、こんなに浩瀚な知識を広げ、議論して見せ、時に晦渋の印象を与えるのでなく、明晰簡潔に論じる言葉を聴かせるべきではなかったかという思いがある。敢えて言う。語り過ぎてはいないだろうか。

(かとう・つねあき 神学者)
(A5判・三三八頁・本体二〇〇円＋税・教文館)

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

聖書を読んだ30人

夏目漱石から山本五十六まで

鈴木範久(著)

近代日本人は聖書のメッセージを
どう受け取ったのか?
日本キリスト教史の泰斗が深い共感をもつて描く!



各方面で活躍した日本人がキリスト信徒であるなしに関わらず、聖書とどう向き合い、生き方になどどのような影響を受けたか。それを日本キリスト教史の第一人者で、内村鑑三研究者としても知られる鈴木範久氏(立教大学名誉教授)が探りました。

●B6判 ●並製 本体1,600円＋税

ARサービス「ココアR2」
スマホアプリで著者のメッセージ動画を

お問合せ ☎03(3567)1987 頒布部
<http://www.bible.or.jp/>

牧師・神学生の説教準備に必読の書！

D・スチュワート著
山吉智久訳

旧約聖書の積義

本文の読み方から説教まで



小友 聡

旧約聖書を学ぶ神学生や牧師たちのためのとても良い本が出版されました。本書は旧約聖書積義に欠かせないガイドブックです。これまで旧約聖書積義の教科書と言え、H・バルト／O・H・シュテック（山我哲雄訳）『旧約聖書積義入門』（日本基督教団出版局）がありました。しかし、内容が煩瑣で難しく、初学者が使いこなすにはハードルが高すぎました。このたび出版された『旧約聖書の積義』は旧約聖書積義の入門の手引きとしてもってこいです。これは、すでに刊行されているG・D・フイー（永田竹司訳）『新約聖書の積義』の旧約編、『旧約聖書神学事典』の翻訳者である山吉智久氏により翻訳されました。

著者ダグラス・スチュワートは米国のゴードン・コンウエル神学校で教鞭を執る旧約学者。英語圏の注解書シリーズで最も親しまれているWBC (Word Biblical Commentary) のホセア書／ヨナ書注解の執筆者として知られています。原著の初版は一九八〇年ですから、今から三七年前。以来、版を重ね、二〇一三年には第4版となりました。現在、米国の神学校で最もよく使用される旧約積義の教科書の一つです。

成の準備を中心に置いているということでしょう。先ほど紹介したドイツ語圏の旧約積義の教科書、バルト／シュテック『旧約聖書積義入門』と比べてみると、その違いがよくわかります。本書は日本の牧師たちに歓迎されるでしょう。第4章の詳細な文献案内も非常に役に立ちます。

本書の価値は、ヘブライ語原典からどのように積義をするか、その手順を分かりやすく解説した第2章と文献案内の第4章にあります。今、神学教育の現場では、旧約原典からの積義の手順を説明するのに教師たちは苦労します。それだけに、本書は今後、旧約積義の教科書のスタンダードになるに違いありません。ただ、問題も少々見えてきます。本書は積義の仕方について分かりやすく説明しますが、積義の本質や意義については素通りし、また伝承史や編集史という解釈の方法論についてはほとんど扱いません。テクストを聖書学的に深く掘り下げて解釈する面白さより、説教準備の方に傾いています。そういう意味で

本書は四章構成で、第1章「積義の全過程についての手引き」、第2章「積義と原典本文」、第3章「説教のための積義の簡潔な手引き」、第4章「積義の参考書」というコンパクトな内容です。第1章は、テクスト、翻訳、文法的情報、語彙の情報、様式、構造、歴史的な脈、文学的文脈、聖書の文脈、神学、適用、二次文献という順序で書かれ、積義の全過程について総合的なガイドラインが提示されます。第2章は、第1章のガイドラインに基づくヘブライ語原典からの具体的な積義の手引きです。第3章は、説教を作成するための実用的な積義の手引きで、第1章と2章の積義の手順を説教作成を目的とした積義に翻案したものです。おしまいの第4章は、旧約積義で必要とされる文献案内となっています。

本書の最大の特徴は、第3章の表題が示すとおり、説教準備を念頭に置いた具体的な積義の手順を提示していることです。しかも、なんと5時間で積義を終えられるように解説されています。これは、本書を典型とする米国型の旧約積義は聖書学的な知見に立つて解釈するだけではなく、あくまで牧師の説教作

は、本書を補う参考書がどうしても必要になります。山吉氏の翻訳は直訳調で、正確に訳されています。第4章では、原著の外国語文献に加えて、日本語で読める文献も紹介されており、本書はそれだけでも十分利用価値のある旧約積義入門書です。蛇足ですが、BHSの手引やWonnebergerの著作については松田伊作氏の翻訳がありますし、またAharon編の *Caria Bible Atlas* の翻訳もありますので、再版の際にはぜひ書き加えていただきたいと思います。

旧約原典から説教を準備する牧師や神学生の皆さんには必読の書です。ぜひお読みください。

(おとも・さとし) 東京神学大学教授、日本基督教団中村町教会牧師
(A5判・二七〇頁・本体三五〇〇円+税・教文館)



教文館の本

http://shop-kyokwaisha.com/



牧師神学生・信徒必携の書！ A・ベルレユング／C・フレールフェル編 山吉智久訳

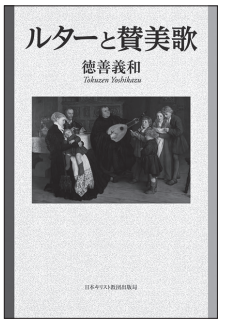
旧約新約聖書神学事典

旧新約聖書を貫く基本的な概念を、カトリック、プロテスタント共同で解説。信仰の源泉として聖書を読み解くために不可欠な事典。執筆者全15名、全212項目を収録。 ● A5判・680頁・本体18,000円

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3561-5549
星 / 図書目録 ● 価格は税別

賛美歌において今なお継続する宗教改革
徳善義和著

ルターと賛美歌



日笠山吉之

敬愛する徳善義和先生が、御自身のライフワークとされているマルチン・ルターと彼が産み出した賛美歌について、『礼拝と音楽』（二〇一三年春号）二〇一六年秋号）に十五回にわたって連載されました。私はかつて神学校在学中に先生から教えを受け、また卒論の指導もしていただいたので、毎号楽しみに読んでいました。連載が終わり寂しい思いをしていたところ、本として出版されたので早速地元のカトリック書店に行き手に入れた途端、本欄への紹介依頼文が届きました。神学校時代、暇さえあればオルガンを弾き、バッハの音楽ばかり聞いていた私は、決して先生の良き教え子ではありませんでしたが、せめてもの恩返しにと本欄を引き受けた次第です。

さて、ルターは何よりもまず礼拝改革者だったので、そこで語られる神の言葉、神への祈り、そして神の臨在である聖餐に、当然のことながら大きな関心を寄せました。また、会衆がいれば置き去りにされていた当時の礼拝に会衆を戻すべく、ルターは様々な試みも行いました。聖書や礼拝式文の自国語（ドイツ語）訳、そして賛美歌の創作もそうです。それまでは、会衆が

自分たちの国の言葉で聖書を読むことも、祈りや賛美をささげること、ままならなかったからです。それで神学者にしてかつ音楽の素養もあったルターは、自らたくさん賛美歌を書き下ろしました。その数は、約四十編と言われています。それらの中には、歌詞だけでなく自ら作曲したものも含まれています。どれをとってもルターらしく、聖書のみことばに基づいた福音的な賛美歌ばかりです。

徳善先生は、これらルターが書き下ろしたと言われている賛美歌の中から二十曲余りを取り上げられ、それぞれの賛美歌が生まれた動機や時代背景からはじめ、テキストの内容に深く迫られています。さらに巻末には、本文中で取り上げられなかった十六曲についても譜面と訳詞が紹介されているので、ルター作によると言われている賛美歌のほとんどが本書に網羅されていると言つて良いでしょう。特筆すべきは、それぞれの賛美歌の全訳（長いものは十節以上に及ぶ）だけでなく、それらの賛美歌を実際の旋律に乗せて何節か歌えるように整えてくださったこと！これは実はなかなか大変なことなのです。外国語の

賛美歌の歌詞をただ翻訳するだけでなく、それを自国語で、しかも分かりやすい口語体で歌えるように整えることは至難の業です。私が現在関わっている『教会讚美歌増補』の編集作業にあたっては、悩みどころです。しかし、この困難な業を避けては、新しい賛美歌は決してこの世に根付くことなく、宣教にも信仰にも与えることはないでしょう。ですから、徳善先生には心から感謝いたします。先生が提示された歌詞を元にして、まだ日本では紹介されていないルターの賛美歌を、今後紹介していくことが出来ればと考えています。

今回取り上げられたルターの賛美歌には、既に『教会讚美歌』や『讚美歌21』に収録されているものももちろんあります。しかし、それらについても新しい訳が試みられています。それは、先生が「まえがき」で触れられているように、「当時ルターが民衆に歌えるような、民衆の言語の賛美歌を志した思いに和する」心ゆえでありましょう。「これからの世代を考えれば、今

後改訂出版されるほどの賛美歌集ももっと積極的、具体的に口語の歌詞を考え、努力しなければなるまい」という先生の思いに、私たちも耳を傾ける必要があるのではないのでしょうか。

ルターの宗教改革五百年の年に本書が出版されたことを喜び、感謝しつつ、しかし、先生が述べられているようにそれを単なる「記念」として終わらせることなく、宗教改革という出来事を「それ自体その中核の福音使信と教会改革として私たち自身の教会において継続しているし、継続されなければならない」とものとして受け止め、主を賛美し続けていく教会でありたいと願うものです。

（ひがさやま・よしゆき）日本福音ルーテル札幌教会・恵み野教会牧師
（四六判・二五〇頁・本体二四〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

賛美歌作家としてのルターに迫った『礼拝と音楽』好評連載、望みの単行本化！



ルターと賛美歌 徳善義和

好評発売中

ルターに会衆賛美を導入したのはルターであった。ルター研究の第一人者が、ルターの信仰から生まれた賛美歌を楽譜と現代語訳付きで紹介、その作られた背景、そこに込められた神学を解き明かす。 四六判 並製・250頁・2592円

『礼拝と音楽』誌面で取り上げられなかった16曲の現代語訳と楽譜も収録！

宗教改革500年記念 上記書籍も対象！

読者プレゼントキャンペーン実施中！

宗教改革を取り上げた書籍・雑誌の応募マーク（点数）に応じて図書カードがもらえるキャンペーンを実施中！詳しくはホームページで！



日本キリスト教団出版局

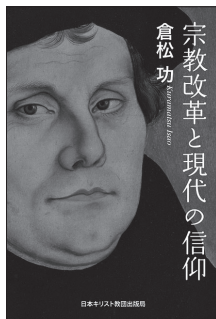
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyoku@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)

http://bp-uccj.jp

ルターについての数々の「定説」を覆す書

倉松 功著

宗教改革と現代の信仰



上田 彰

書評子がドイツ留学時代に所属していた研究室で助手をしていたM・ヴェンテ（教文館『キリスト教神学の主要著作』著者）とは、ドイツの神学思想の状況を教えてもらい、日本の教会・霊的状况を教えるという、贅沢なやりとりを許された関係であった。ある時彼が、ルターがドイツ神学の不動のスタンダードであることを示す文脈で、次のように語った。どの神学者も「ルターと○○」という形で自分の神学を展開する。私たちの共通の師匠であるシュヴェーベルはルターとK・バルト、その同僚のヘルムスはルターとシュライアマッハー、まあルターとルターっていうのもいるけどね（テュービンゲンのO・バイヤーや、ハイデルベルクのヘルレなどであろう）、と。その時私の脳裏によぎったのは、「日本にはルターとカルヴァン、と呼べる研究者がいる」ということであつた。もちろん本書の著者倉松功氏のことである。意外にもドイツにはそのような研究者が少ない。

本書は「福音主義教会連合機関紙」という、購読者の大半が信徒である紙面に二〇一五年に連載されたものが元になってい

る。しかしルターについての初心者向けの啓蒙記事ではない（信徒向けの紙面だから初心者向け、という前提がそもそもおかしいのだが）。限られたページ数の中で、ルターについての「定説（または偏見）」をいくつも覆す。以下、本書を概観する際、いくつかの章については「定説・倉松説」の順で記してみたい。

第一章「宗教改革の宗教」では、福音主義教会はローマ・カトリック教会や正教会と一緒に「一つのキリスト教」として宗教性を有するという定説に挑戦し、宗教改革は自身で一つの宗教となつている、と主張する。その前提になる「宗教（性）」とは、「古い真の教会へ復帰することによって前進する」という改革者の意識にあつたという。第二章「恵みのみ、信仰のみ」では聖化の恵みをルターが強調しないという定説に挑戦し、ルターにも律法の第三用法に相当するものが見出されると言う。義認と聖化がキリストにあつて一つであり、キリストの義の転嫁としての恵みという考え方は、「義の注入」を主張するローマ教会との違いとして重要であろう。第三章「万人祭司」では

プロテスタント教会では信徒と教職の区別が制度上存在しないという定説に挑戦し、万人祭司性とは、固定化しない思想のことであると言う。ここから現代における民主主義の根底にある宗教性に言及する視点は慧眼である。第四章「教会」では、教会とは施設、福音は思想であるから、両者の一致に必然性はないという固定観念に挑戦し、特に長老の職制や聖礼典に言及し、外的なものや霊的なものが可視的な教会となつていることを述べている。第五章「ミユンツァーと農民戦争」においては、ミユンツァーが宗教改革の影響を受けている以上、ルターとの類似性があり、ひいては農民戦争は宗教改革の必然的な（唯一の、ではないにせよ）結果であるという定説に挑戦し、ミユンツァーの思想にある無媒介的な霊感主義や完全な義人という立場はルターと異なると述べる。第六章「イスラム教」は当時のトルコとの戦争でルターが好戦的な立場であつたという定説に対し、異教徒からの攻撃は悔い改めの契機であると述べていたことを紹介する。第七章「ルターにおける人権」では、彼は人

権思想が弱い中世の人に過ぎないという定説に対し、律法の第三用法や市民社会倫理への福音の浸透、万人祭司性という既述の論理を用いつつ、『キリスト者の自由』を人権思想の著書として読み解く。さらに、第八章「キリスト教学校」では、「神奉仕」というキリスト教育の特徴について、第九章「ルターとバルメン宣言」及び第十章「ルターとボンヘファー」では国家理解を通じてルターと告白教会のボンヘファーとの異同を論じる。第十一章「ルターとドイツ憲法」ではドイツ憲法（人権、教育権）の神学的な性質について、また「あとがき」では「義認の教理に関する共同宣言」に言及する。

本書は書名の通り、ルターの現代的性格を明らかにするところに狙いがある。これは同時に「御言葉によって改革され続ける教会」という改革派教会のモットーにも通じる。まさに著者の本領発揮、面目躍如である。

（うへだ・あきら）日本基督教団伊東教会教師

聖書に登場する 12人の非凡な女性たち

ジョン・マッカーサー 山口孝訳

*絶賛発売中！

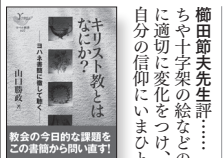


米国のAnsonカスターレビーから
本書は聖書の非凡な女性たちについての洞察や、普段目にも留めなかつたような知識を教えてくれる。この本は、平凡な女性たちである私たちが神の約束に立つとき、非凡な女性に変えられることを教えてくれる。平凡な女性たちの試練、苦難、喜び、勝利ある生活は、様々な方法を通して全員を非凡な女性に変え、私たちに聖書の教えに堅く立てるように励ましてくれる。

A5判変型・320頁 2,500円＋税

キリスト教とはなにか？

ヨハネ書簡に徹して聴く 山口勝政 著

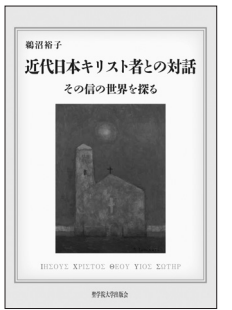


「信仰を揺るぎないものにする説教」説教者たちや十字架の絵などの写真が適度に配置され、字配りにも字の大小に適切に変化をつけ、余白も適当に取られており、大変読みやすい。自分の信仰にいまひとつ確信を持っていない方は確かな確信の拠り所を。信仰の豊かな養いを望んでおられる方は自分の信仰のあり方の再点検を。講義説教の具体的な見本と励ましを望む方は御方と御霊の導きをもとめて更に真剣に説教の取り組みへの挑戦を受ける。ぜひ一読を。一、〇〇〇円

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
お問合せは info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
*自費出版の専門出版社*資料・呈

近代日本プロテスタント思想研究の新しい視座
 鶴沼裕子著

近代日本キリスト者との対話 その信の世界を探る



深井智朗

ベルリンのシンポジウムで、「日本人からヴィルヘルム・ドイッの話を聞くとは思わなかった」という時代錯誤な感想を聞いた後で、同時代の日本のことについて質問され、うまく答えられず（というよりはあまりよく知らなかったたので）それに追いつきかけようという敗北感を味わった。

日本のことについて質問した研究者は、日本のプロテスタント教会の歴史を研究しているという。日本語を自由に使いこなして、日本人研究者の著作や一次資料にも目を通している。次の日の会合でも一緒になり、日本の近代史の話になったのだが、神学者ではなく、歴史家である彼女の不満は、日本のキリスト教研究が今なお既存の教派を前提としていることであつた。その前提のもとに研究をはじめると、教派的な伝統から外れるような出来事は意味のない些細な出来事となり、自分たちの宗教的主張の正当性を証明したり、補強するための材料を過去に探しに出かけることになるという。そこで社会学や歴史学の方法論に自覚的な研究はどうかとたずねると、いずれも日本の近代とキリスト教という枠組みが強すぎて、宗教的な内容の吟味に

まで至っていない期待はずれな本だったと言われた。ちなみに私がドイッの雑誌に書いた明治期のキリスト教について書いた論文にもそれとなく言及してみたのだが、「面白くはなかった」と言われてしまった。

暗澹たる思いでベルリンから帰国後、本書を読む機会を得た。鶴沼裕子氏（本当は先生と書きたいところだが）の第三論文集である。

鶴沼氏の「近代日本におけるプロテスタント思想」研究の方法論は、「古典的文献の吟味検討を通して、研究対象をそれ自体に内在する論理や発想法に即して解明する」、「解釈学的方法」である。それによって「欧米、特にアメリカの福音主義的な信仰形態をモデルとして研究対象を吟味検討し評価していく」方法、「天皇制下にあった当代の価値観や、前時代から続く土俗的なエートスの残滓を、近代的なキリスト教的価値観によって克服する」というような使命感にも似た前提をもった研究が、研究対象自体のありようの解明に至らないばかりか、それ自体を歪めてしまった過ちを回避しようとしている。

たとえば近代日本のキリスト教史の研究で言及される「日本的なもの」は、従来の欧米のプロテスタンティズムをモデルとする分析からすると、前近代的な日本精神の残滓であつたり、よくても福音を「媒体」したのものになってしまう。しかし鶴沼氏は言う。植村正久を例にとり武士道とキリスト教ということを考えるなら、「彼がその中に生まれ育った武家社会のエートスが、単に彼のキリスト教信仰に色濃く反映しているなどというレベルにはとどまらず、彼のキリスト教理解を構成する重要な要素の一つとなっている」。

このような方法論に基づいて、植村正久、内村鑑三、新渡戸稲造、波多野清一、賀川豊彦、高倉徳太郎、海老名弾正などの思想を取り上げた七つの論文が本書には収録されている。読者は本書を通読することで、著者とともに「われわれが対象を解釈してその像を作り上げるというよりは、対象自身が研究者に己を表す」という経験へと至ることであろう。

この第三論文集で鶴沼氏が新たに強調されたのは、キリスト

者の「信仰的原体験」で、序章「方法的視座としての宗教的体験」での議論は、鶴沼氏独自の解釈学的思想史研究をさらに前進させるものであり、宗教思想史研究を志すすべての者たちに対する新たな、しかも重要な問題提起である。鶴沼氏は「神についての思弁的な議論や、信条や教会制度、既存の宗教的組織としてのキリスト教、さらにはキリスト教的社会活動等ではなく、それらの根底にある『宗教体験』そのもの」と向き合うことの重要性を主張している。

帰国後ベルリンに送った礼状で本書を紹介したことは言うまでもない。本書が、近代日本のプロテスタント研究や宗教思想史研究に新しい視点を提示していることはもちろんであるが、それを超えて、宗教とは何か、信じる人生とはどのようなことなのか、という普遍的な問題を考えるために必読の書だと確信したからである。

（ふかい・ともあき＝東洋英和女学院大学人間科学部教授
 A5判・二三八頁・本体三〇〇〇円＋税・聖学院大学出版会）



宗教改革の問い、 宗教改革の答え

95の重要な鍵となる出来事・人物・論点

ドナルド・K. マッキム
 原田浩司*訳



プロテスタントの改革をめぐる問いにわかりやすく、簡潔に、生き活きと答える。キリスト教界全体を劇的に変えた複雑な宗教改革の全体像をマッキムが見事に、明快に整理してみた。「宗教改革」を理解するための最良の入門書！

A5判・並製
 定価【本体 2,000 + 税】円
 ISBN 978-4-86325-106-9



株式会社 一麦出版社
 札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
 TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
 携帯 mobile.ichibaku.co.jp

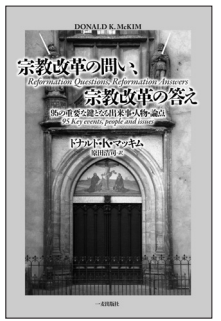
改革者たちの熱い思いが伝わる！

ドナルド・K・マッキム著

原田浩司訳

宗教改革の問い、宗教改革の答え

95の重要な鍵となる出来事・人物・論点



真田 泉

宗教改革五〇〇周年を迎えた二〇一七年、信徒の方々から宗教改革について一冊でやさしく学ぶことができるハンデイーな入門書が出版されたことを嬉しく思います。著者のドナルド・K・マッキム氏は信徒向けの入門書を多く執筆し、日本では特に原田浩司先生によって精力的に訳されてきました。これらの本の価値は、今でも多くの教会で、そして私の仕えている教会で各会、特に青年会で今も用いられていることにあらわれています。

マッキム氏は二〇〇九年九月に開催された日本キリスト教会神学校植村正久記念講座の特別講師として、リンダ・ジョー・マッキム夫人と一緒に来日されました。約三週間という長期の講演旅行を引き受けてくださり、札幌、大阪、福岡、東京の会場教会で講演（『現代に生きる改革教会の信仰』一麦出版社刊）してくださいました。当時、わたしはこの講座の準備委員であり、原田先生に通訳などお願いしようとしたのですが、その期間スコットランドに留学中でしたので、その願いは残念ながらかないませんでした。

照しながら読み進めていくことができるようになっていきます。

第一部では「予備知識」として、宗教改革とは何か？から始まる初歩的な問いがあり、そして「主要な改革者たち」、ウイクリフから始まり、メノー・シモンズ、イグナティウス・デ・ロヨラまで、ローマ・カトリックも含めた十七人の改革者たちが取り組んだこと、その後には当時の「出来事および展開」が簡潔に説明されています。当時の改革者たちがまさに命をかけて何を大事にしていたのか、何に生かされ希望をもったのが教えられるのです。

第二部では、さらに核心に迫り、改革者たちやその影響のもとで作られた「神学的表明」、そして今の私たちの信仰の基本である「神学上の主題」を学びます。主の晩餐や教会と国家の問題など、プロテスタントの間で見解が分かれた諸問題も詳しく学ぶことができます。著者は長老派・改革派の伝統に属していますが、自らの伝統に偏ることなく、他の伝統も公平に温かくその良さを理解しながら、説明されています。そして最後の「遺産」では社会倫理、現代科学、各教派のその後の歩みなど、宗教改革がどのように今日に影響を与えてきたのか、今日の私

この講座にマッキム氏が教えておられたアメリカのデビュク神学校でのかつての教え子で、現在日本で牧師として仕えておられる日本人の先生が出席されたことがありました。この方が休憩時間、笑顔で力強く言われた言葉は今でも忘れません。

「自分の中に流れているジャン・カルヴァンの血が熱く燃えてくる」。その時、わたしは宗教改革者の教えは今でもなお人を熱く燃え立たせていくこと、そしてマッキム氏の授業はこのように改革者の熱いものを伝えていくしかたで行われているのだと思わせられました。その植村講座の講演でも、マッキム氏は聴衆の一人ひとりの顔を見回しながら、目が合うと笑顔で一人ひとりを迎え入れ、伝統的に受け継がれてきた信仰の要点とその現代への適用のしかたを丁寧に教えてくださり、心を熱くされたことでした。

本書からも宗教改革者たちの熱い思いが伝わってきます。本書は宗教改革者ルターが『九十五箇条の提題』を掲げたことにちなんで、95の問いと答えて構成されています。便利なおことに、本書の冒頭部分に宗教改革の略年表があります。必要な時に参

たちにどのような意義があるのかが教えられるます。

本書から、宗教改革の教えが「五〇〇年前とは環境や文化が大きく異なっている」、キリスト者として生き続ける道筋の手引き」であり、そして現代の教会と信仰者がその上に立つてさまざまな課題に取り組むための大事な土台、出発点であることを読み、神の言葉への信頼に導かれ、希望を与えられます。改革者たちがすべての人のために追求して示した「イエス・キリストにおける神に仕える中で祝福と喜びに満ちた人生」を現代の私たちも与えられていることを知り、心を熱くさせられるのです。

この本の帯には宗教改革五〇〇周年を記念したロゴが配置されています。ルターとカルヴァンの肖像および、ルターの薔薇とカルヴァンのハートを組み合わせたロゴで、世界を内側から温め、希望を与えていくことを思わせるものです。本書が多岐の方々に読まれ、力と希望、熱い思いを与えられることを願っています。

（さなだ・いずみ）日本キリスト教会東京王権教会牧師

（A5判・一七四頁・本体二〇〇〇円＋税・一麦出版社）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区2-17-11	022-223-2736	共用		fcqwkw524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区銀座4-5-1	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbdo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-9230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.jp/yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	02250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshala.coccan.jp/	nagoya-seibunshara@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexlim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環区西原字翁原777	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

■新教出版社

戦後70年の神学と教会——新教コイノニア35

新教出版社編集部編

『福音と世界』連続特集を単行本化。第1章「神学」では、聖書学や組織・実践・歴史神学のみならず、神学教育、フェミニスト神学、沖縄の神学や移住民の神学の豊かな広がりや提示。第2章「教会」では、諸教派の戦責告白を踏まえつつ、教会が果たしてきた働きと残された課題を振り返る。全17名の論者による戦後70年の総括！

A5判・162頁・本体1500円

第二コリント書 8章―9章

〔現代新約注解全書〕

佐竹 明著

著者のライフワークたる第2コリント注解がいよいよ刊行開始。第1回配本は、献金問題を論じた重要な箇所集中、400字詰めにして1000枚を超える詳細を極めた注解。今回は10章から13章までを予定。

A5判・408頁・本体予価8000円

■教文館

こころの深呼吸——気づきと癒しの言葉366

片柳弘史著

インターネットで5万以上の共感を集めたつぶやきを書籍化。現代に生き、まにちち頑張るあなたへ向けた言葉の贈り物。大切な方へのプレゼントにも最適！

A6判、390頁、本体9000円

祈る——パウロとカルヴァンとともに

R・ポレン著／川中子義勝訳

祈りとは、「私」に死んで、キリストの体なる「我ら」のうちに甦ること！実践神学者にして詩人でもある著者が、祈りの修練を教える指南書。

四六判、214頁、本体5000円

INFORMATION

近刊情報

■日本キリスト教団出版局

NTJ新約聖書注解

ガラテヤ書簡

浅野淳博著

なぜ教会の破壊者が、異邦人宣教の使徒となったのか。このパウロの劇的な回心の背後にある、歴史と思想とを簡潔に語るガラテヤ書。本書簡を最新の研究成果に字びつつ読み解く。パウロ神学入門の役目をも果たす、納得と新しい気づきに満ちた、聖書読者必携の書。

A5判・538頁・6000円

《シリーズ刊行開始記念》特価4800円*2018年3月31日まで

主日礼拝の祈り

越川弘英／吉岡光人 監修

1年間の教会暦に即して主日礼拝での祈りを提示する、信徒・牧会者のための祈禱集。各主日と祝祭日の「開式の祈り」64編、「行事の祈り」20編、そして「罪の告白の祈り」19編、「執り成しの祈り」「奉献の祈り」各15編を収録。礼拝を豊かにする実践的な一冊。

B6判・136頁・1500円

このえほんだいすき！

読み聞かせのための48冊

細川和子著

おはなしと絵本の会「代表として、子どもたちへ34年間読み聞かせを続けてきた著者が、絵本の選び方が分からない大人たちに、「ただ楽しく、幸せで、純粋な物語を届けたいのです」と語りかける。国内外の48の名作を紹介、絵本選びの悩みを解決し、新たな物語の世界をひらく一冊。

四六判・134頁・1300円

福音と世界

2017年11月号

特集 ユダヤ教のいま

寄稿者 早尾貴紀、赤尾光春、山森みか、手島勲矢、シナゴーク取材

マルゴット・ケースマンに聞く／新連載 福音の地下水脈 中村うさぎ／好評連載 台湾キリスト教史（高井ヘラー由紀、第一テモテ書（辻学、現代神学の冒険（若名定道）、レヴィナスの時間論（内田樹）、聖書とわたし（森達也）、ことばの履歴書（佐藤優）ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から

『クリスマス』（ヤン・ピエンコフスキー絵／木原悦子文／日本キリスト教団出版局）について、得意気に語った一年前のことを今は後悔している。

背景や文字の飾りに一部彩色を施しているものの、主要な部分はすべて黒いシルエットで表現されている影絵のような絵本。水墨画に「墨は五彩を表す」という言葉があるが、この絵本にも用いたい。

二〇一六年のクリスマス見本市会場で拝見させていただいたときは、本当によく知っていると思っていた。子どものときに何度も見た洋書を日本語訳で読む幸せ。受胎告知や、ヘロデ王が登場する場面に見覚えがなくても特に気にしなかった。しかしその後、幾度か目にする機会があるなかで、どうしても合点がいかず、ゆっくり記憶を振り返ってみてやると、絵本を見る

のは初めてであったことに気がついた。

最近、自分の記憶に自信が持てないと感じる人が多い。

『クリスマス』を最初に知ったのは、子どものときに愛読していた雑誌の紹介だった。ハガキ半分ほどのスペースに表紙と本文の小さな写真が二、三枚掲載されていた。すぐにこのヨーロッパの香り漂う絵本がほしくなった。でも手に入れられない仕方がないので描き写して自分で作る。この無謀な取り組みを数年間クリスマスシーズンが来るたびに繰り返したことを思い出した。挑戦したところは羊飼いの知らせの場面。子どもはの妄想力は恐ろしい。制作中は天使の歌声が響いた。羊飼いたちの驚きの声が聞こえた。寒い夜に暖かな温もりを感じたような気がした。

今回改めて拝見し、この黒いシルエットによくあんなにも、五彩ならぬ五感を見つけ出したものだと思った。約三センチ四方の小さな絵で彩ったクリスマス。今考えると少し危険！

日本語訳版は、文字のレイアウトも原書の風合いを損なうことなくデザインされている。幼子のみつけた博士の喜びや赤ちゃんの産声も、また、聞こえてくるだろうか。（吉崎）

本のひろば 2017年12月号 予告

本・批評と紹介…上田光正著『キリストへの愛と忠誠に生きる教会』、佐竹順子著『あなたに平安がありますように』、A・マクグラス著『神学よるこび』、藤本朝巳著『松居直と絵本づくり』、B・ゴードン著『キリスト教要綱』物語、加藤常昭著『自伝的伝道論』他

『福音と世界』連続特集総集編

ギレアド

「私はこの本の虜になった」バラク・オバマ

マリリン・ロビンソン著／宇野元記

2005年、ピューリッツァー賞および全米批評家賞受賞小説



カルヴァンとバルトを愛読する老牧師が自らの死期を意識し、若い妻との間にもうけた幼い息子に手紙を綴る。南北戦争から冷戦期にいたる三代に亘る牧師一族の信仰の歩み。忍び寄る時代の変化。親友の息子の帰郷と妻、そして自らの戸惑い。隣人たちの人生――。

◆四六判・本体3000円

戦後70年の神学と教会

10月12日

新教出版社編集部編〔新教コイノニア35〕

戦後日本のキリスト教界が歩んできた道のりを、部門別に振り返り、今後の課題を展望する。

【寄稿者】新約学Ⅱ八木誠一、旧約学Ⅱ山我哲雄、キリスト教史学Ⅱ出村彰、組織神学Ⅱ芦名定道、実践神学Ⅱ中道基夫、神学教育Ⅱ深田未来生、フェミニスト神学Ⅱ吉合かおる、沖縄の神学Ⅱ宮城幹夫、移住民の神学Ⅱ関田寛雄ほか8名、全17論考。

◆A5判・本体1500円

宗教改革と現代

改革者たちの500年と
これから

新教出版社編集部編〔新教コイノニア34〕

大反響

宗教改革は何を変えたのか。何を継承すべきなのか。多角的なアプローチによる総特集。

【寄稿者】芳賀力、竹原創、吉田忍、池田裕、吉合かおる、島しづ子、林巖雄、江藤直純、村山盛暈、有村浩、川向肇、袴田康裕、山森みか、李恩子、藤井創、鈴木浩、具正謨、原敬子、松島雄一、中野泰治、村上みか、小田部進、菊地純子、澤村雅史、水野宏、桑野明、堀江有里、永本哲也、木ノ脇悦郎、筒井賢治、小林繁子、朝香知己、渡辺英俊、野々瀬浩司、伊勢田奈緒、蝶野立彦、西川杉子、クラウス・コシヨルケ、山本俊正、深井智朗。

◆A5判・本体2200円

キリスト教思想史Ⅱ

フスト・ゴンサレス著／石田学訳

アウグスティヌスから
宗教改革前夜まで

好評

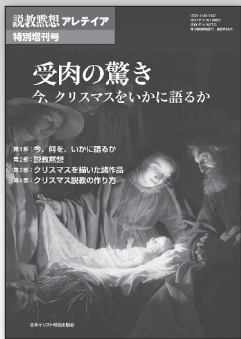
中世とは、夜明けか夕暮れか？ 古代の終焉と近代の誕生を架橋する中世――それはキリスト教に何をもたらしたのか。本書は中世思想史を細部の機微まですくい上げながら、そのダイナミズムを見渡す大きな展望を鮮やかに与えてくれる名編。

◆A5判・本体5000円

既刊 **キリスト教思想史Ⅰ** キリスト教の成立からカルケドン公会議まで

◆A5判・本体5000円

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ http://bp-uccj.jp 《価格8%税込》



説教黙想アレティア 特別増刊号

受肉の驚き

今、クリスマスをいかに語るか

2017年10月11日
刊行予定

イエスの受肉という驚くべき恵みの知らせ。あらためて聖書に聴き、神学に学び、そして絵本やマンガ、音楽、映画など様々な芸術を通して、クリスマスを驚こう。クリスマス説教作成の手引きも収録。

◆B5判・128頁・2,000円

同時増刷 『見よ、この方を! 今、復活と十字架をいかに語るか』 2,000円

このえほん だいすき!

細川和子

読み聞かせのための48冊



長く読み聞かせに携わってきた著者による絵本案内。国内外の48の名作を紹介、絵本選びの悩みを解決する一冊。

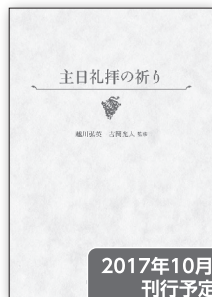
◆四六判並製・134頁
1404円

2017年10月20日
刊行予定

礼拝ですぐに使用できる待望の祈り集

主日礼拝の祈り

越川弘英/吉岡光人 監修



各主日と祝祭日の「開式の祈り」、「行事の祈り」、「執り成しの祈り」や「奉獻の祈り」などを収録。礼拝奉仕者必携。

◆B6判上製・136頁
1620円

2017年10月20日
刊行予定

Mission Diary 2018

教会生活や勤め先の予定管理に最適!
大きな文字で見やすいB6判手帳

ミッション
ダイアリー



新色
ブラウン
新発売!

- 見開きの年間/月間/週間予定表
- 日曜日始まり、広い日曜日枠
- 教会暦、教会行事、聖書日課を収録

各 ◆B6判・160頁・1,512円 (ご要望に応じて価格を引き下げ!)

アイボリーも
引き続き発売